

編集委員が選んだ本

『1945年のクリスマス』

ベアテ・シロタ・ゴードン著、平岡磨紀子構成・文
／柏書房、1995年10月、1835円

著者は偶然、日本国憲法の草案作成に携わるが、1929年からの10年間を日本で過ごし、女性の置かれていた状況に胸を痛めていた。彼女の案は、現在の14条、24条の条文に生かされたが、その実現までには紆余曲折と数々の人間ドラマがあった。「歴史は人間がつくる」と実感させられる。今年4月に著者の講演を聴いて魅了されたが、その人となりを育んだ家族愛、「歴史の生き証人」の重みある証言の数々には圧倒される。平和を大切に、自分の能力の全面開花を目指す前向きな気持ちになった。

『2050年のわたしから 本場にリアルな日本の未来』

金子勝著／講談社、2005年6月、1260円

現在の状況がこのまま続いたとしたら、21世紀半ばの日本はどうなっているのか？ 現実の統計を使って45年後をシミュレーション、その結果は…日本が直面している問題とその解決の方向性が示されている。イラストが豊富で、読みやすい文体。これから現代社会や政治経済を学ぼうとする高校生の絶好の入門書。

『市場原理が医療を亡ぼす アメリカの失敗』

李啓亮著／医学書院、2004年10月、2100円

「株式会社による病院経営容認」「混合診療解禁」といった議論に警鐘を乱打した書。いま、「規制緩和すれば消費者にプラスになる」という発想から、市場原理にゆだねることが「改革」という名で喧伝されているが、アメリカの医療の場で何が起きているか。事例が豊富に紹介されており、背筋が寒くなる。アメリカでは、財力のない人ほど保険料負担が高くなるばかりか、医療費負担も高くなる…！ これが日本の未来か？

『未来をひらく歴史 東アジア3国の近現代史』

日中韓3国共通歴史教材委員会編著／高文研、
2005年5月、1680円

中国の康有为、韓国の全琫準、日本の中江兆民と言われて、何をした人たちが知っているだろうか。いずれも1894年の日清戦争前後に活動していた、各国の人々にとっては有名な人々である。しかし日中韓とも「自国史中心」で互いのことに無関心であるため、相手国について無知な状態にある。こうした無知・無関心な歴史感覚が偏見・差別意識をはびこらせ、ひいては話し合いではなく、戦争・暴力による解決方法を選び取らせることになる。平和・民主主義・人権の大切にされる日本、東アジア、世界のために、知っておきたい歴史がここにある。

『女帝の古代史』

成清弘和著／講談社現代新書、2005年7月、777円
女帝輩出の理由を、学者の多くが根拠にしている日本書紀ではなく、唐と日本の令の規定を比較する中で明らかにしようとした意欲作。古代における女性の所有権やその社会的地位の問題など、社会史的な視点からの考察によって新たな女帝像が提示されている。

『平和と平等をあきらめない』

高橋哲哉・斎藤貴男著／晶文社、2004年6月、1470円

2001年4月に成立した小泉内閣の「構造改革」が進む中、確実に経済格差は広がり、「勝ち組」は恩恵を受け、「負け組」は切り捨てられていく社会が目立ってきた。前提となる経済条件の不平等は放置したままに、である。このような機会不平等・非情さが強調される社会が、人間関係にも大きな影を落としている。「人が人を見下すことが日常化する」ことは準戦時体制と同じである。1945年の敗戦以来、「平和と平等」の理想を曲がりなりにも大切にしようとしてきた社会はどうなっているのか。これからどうしていくべきか。改めて問い直したい書である。

『授業づくりで変える高校の教室 1 社会』

井ノ口貴史・子安潤・山田綾編著／明石書店、
2005年7月、1890円

生徒が授業に乗ってこない。生徒だけを責めたって始まらないのはわかっているが…という状況に、私自身も含め多くの教員が陥っているのではないかと。「教えと学びの交響する教室へ」（竹内常一氏の巻頭言から）変えていく突破口はどこにあるのか。この本はいわゆる「教育困難校」での実践を集め、元気が出て、しかも参考になる。こういう本を待っていた！ 他教科も既・近刊。

『大陸侵略は避け難い道だったのか 近代日本の選択』

岩井忠熊著／かもがわ出版、
1997年12月、2100円

かつて大日本帝国政府は、アジア太平洋戦争敗戦まで帝国主義的アジア侵略を続けた。政府の行為による戦争は、日本国民・アジア諸国民の人々へ筆舌に尽くしがたい惨禍を招いた。だがその間、保守的と思われた人も含めて非戦・反侵略論を提起してきた人々がいた。敗戦後60年の2005年。戦場イラクでの自衛隊常駐が政府によって既成事実化される中、憲法第9条改悪を目的とする改憲の動きが進んでいる。私たちの未来はこのままで良いのか。歴史認識の誤りはいかに平和な未来を阻害するか、自由主義史観の登場への警鐘も含めた書である。